

社会と情報

——『心の習慣』と『情報様式論』——

伊藤 守

要 旨

この小論は、昨年から今年にかけて邦訳が出された刺激的な二冊の本、『心の習慣』と『情報様式論』との対話を通して、「現代社会と情報」というテーマに関わる問題のいくつかを示そうとするものである。なお、以下の論述は、札幌学院大学社会情報学部主催「第二回社会と情報に関するシンポジウム」における平野秀秋氏の講演「文明のなかの情報」に対する問題提起として準備したレジюмеにもとづく。従って、論文という体裁を取らず、総論というかたちで纏めた。

1. ベラーの分析視点

『心の習慣』は、アメリカ人の文化的・精神的系譜を個人主義の観念の変容という大きな軸に沿って整理し、現在のアメリカ社会が直面する問題の核心を把握することをめざした第一級の作品である。

ベラーによれば、「聖書的伝統」ならびに「共和主義的伝統」を源流とするアメリカの市民精神は、社会参加と自律の精神を同義とする個人主義にほかならない。しかし、19世紀後半から急速に進展したアメリカ社会の「近代化」は、アメリカ人の価値観と生きかたを支えてきたコミュニティを掘り崩し、経済的・職業的な領域における成功を人生の目標とする「功利的個人主義」と、私的生活における自我の満足の最大化を社会的な善とみなす「表現的個人主義」を生みだしてきた。今日、この二つの個人主義は、一方で経済の効率化を唯一の基準とみなす「経営管理者的エート

ス」と、他方で現存の産業社会の機能的組織を前提としたうえで人生の目標を職業生活とライフスタイルとの適切な組み合わせに矮小化する「セラピー文化」の母体ともなっている。個人主義が、こうして利益の追求と業績の達成を唯一念頭におく多元主義と個人的幸福観の充足という原理に解体されるなかで、公共的な領域・政治的な領域に対する市民の関心は低下し、倫理的な根拠に欠けた権力主義が横行する。言い換えれば、巨大な企業組織と行政機関を支える「経営管理者的エートス」と、私的な空間の内部での個人的な幸福観の達成を善しとする「表現的個人主義」との並存状態、否むしろ両者の相互補完関係こそが現代アメリカ人の社会意識の特徴的な姿なのであり、ここにアメリカ社会が直面する危機の根源がある。

パスカルの概念を継承しトックヴィルが用いた「心」という概念（「日々を生きる、かつ根本的な人間存在を構成する知識を意味す

平野秀秋氏報告「現代文明のなかの情報」に対する質問

92' 7 / 30 シンポジウム

記：伊藤

I. ベラー「心の習慣」のなかで「表現的個人主義」はいかなるものとして捉えられているのか。

⇒「聖書的伝統」「共和主義的伝統」に関する詳細な検討を通じて、アメリカ市民精神の中に生きる社会的参加と自律の精神を明瞭に描いている

⇒「功利主義的個人主義」についても、アメリカ社会の「近代化」過程と重ね合わせながら卓越した分析を行っている→その延長線上に「経営管理者的エートスの文化的覇権」があることも極めて説得的

⇒それに対して、「表現的個人主義」に関しては十分分析されていないのでは？

しかし、現代の「アメリカ文化」（日本の文化も含めて）を考えると、「表現的個人主義」の考察が不可欠

↓

「社会的・自然的エコロジー」の必要性というきわめて魅力に富んだ指摘と市民精神の再建・活性化という課題提起も、「表現的個人主義」の価値観を受け入れた現代人がどう「聖書的伝統」「共和主義的伝統」と結びつきうるのかという問題と関連する（もちろんベラーも単純に二つの伝統に戻れと主張しているわけではなく、聖書的伝統と共和主義的伝統を、「現在のわたしたちの必要に応えてくれるようなやり方で生かし直すこと」が最大の課題であると述べている p. 339）

a. 表現的個人主義をどうみるか

⇒作田啓一：「質的個人主義」から「欲望の個人主義」

ベラーのいう「表現的個人主義」であって、「功利主義的個人主義」ならびにその価値意識が作りだす社会関係に対する批判的ベクトルを内包するもの

⇒リースマン：リースマンの著作を現在の時点で読み返してみると、かれのいう「他人指向自律型」とはアメリカ社会で当時すでに一般化していた「功利主義的価値観」に対抗する性格類型・理論的仮説⇒社交性（ジンメル）の重要性を指摘

1980年代にいわば「自己批判」を行っている⇒「人間的な関係や他者への関心による、自己のふるまいかたへの自己規制」「新しい倫理観」が生成するという見通しは誤っていた←→アメリカ人に生まれたのは「現在指向的な快樂主義」

⇒D. ベル：125年にわたり文化運動としてすべての芸術に君臨した「近代主義」これが「快樂中心」の価値観・生活様式としての快樂の思想の源泉

b. 「表現的個人主義」検討の必要性

①「表現的個人主義」が「快樂主義」を不可避免的に帰結するものなのか（帰結しているのか）どうか問われるべきである

②アメリカの60年代の文化・公民権運動・反戦運動のなかに「表現的個人主義」の積極的な諸側面が生きつづけていたのではないか

③「社会的・自然的エコロジー」の運動・市民精神の再生に対して、「表現的個人主義」がもつポテンシャルティ（快樂主義を乗り越えたかたち）を評価すべきでは？

④トフラーのいう「社会の価値観の多元化」はこの「表現的個人主義」と不可分の問題であり、「表現的個人主義」を通過したあとの「民主主義」のありかたを考えるべき。（「多数派であることを自認する政党組織はその意義を失う」「少数派の多様な要求をすくい上げるチャンネルの構成」というトフラーの指摘は傾聴すべき内容）

c. 「ライフ・スタイルの飛び地」（Lifestyle Enclave）が孕む問題

⇒リースマンの「パッケージ化された社交性」（Packaged Sociabilities）、ブルームの「排他性に対する寛大」（openness to closedness）という問題

⇒ベラー自身も、「ライフ・スタイルの飛び地」という現在の在りかたにアンビバレントな評価を下しているように見える。

一方で、家庭・居住地域さえも「自己にとって望ましい私的ライフスタイルの場」となっており、公共的な善との関係を失った「自己実現」の場

他方で、「純粋な共同体の体現者へ変わる」とベラーは語っているが・・・？
 *日本の場合にはアメリカ以上に、「ライフ・スタイルの飛び地」が「コモン・グ
 ット」を支える社会的基盤になるとは考えられない

II. 「情報技術の成果」と新しいコミュニケーション・パタンの形成

⇒情報技術の革新に伴う幾つかの問題⇒「情報の<様式> or <形式>」の変化



* wrapping of Information

a. M. ポスター The Mode of Information, Polity Press, 1990.

論点：「時間的空間的なコミュニケーションの遠隔化の研究が情報様式概念にと
 て重要であるとしても、問題の本質は情報交換の布置、言語のラッピングの問
 題⇒「主体の世界との関係を再一布置化する」

①言語の自己一指示的な様相の拡大→シュミレーションの問題

②「データベースでの現代的な監視」

③「電子的エクリチュール」の導入による主体の変容

b. 「パッケージ型」情報から「ユニット型」情報

⇒主体の側の「意味づけ」「問題設定」能力がほんとうに問われる

ベンヤミンはこの点について、非常に懐疑的だった

・島薮氏による現代の宗教現象：「意味の希薄化の中で、宗教的セクトが浸透」と
 指摘しているが、問題は情報技術の発展に見合ったコミュニケーション主体の情
 報処理能力

c. 「マスコミ型」情報から「データ・ベース型」情報

⇒「マスコミ型」情報の段階→一応「ジャーナリズム」という社会規範が存在

↓
 「データ・ベース型」情報段階の問題

<Navigation>をどこが担うのか

<どのような役割・目的のもとで>活用されるのか

⇒M. ポスターの権力論：「しくまれた回路の中での情報探し」=新しい権力関係



S. Watt, 「データ・ベース・ジャーナリズム」という概念で問題を指摘

d. 「身体的リアリティ」から「電子的リアリティ」

⇒「現実世界」の対象化・相対化を意図した60年代の文化運動・アウトサイダーか
 ら現在の情報技術が進展→「電子的リアリティ」の拡大・増幅が逆に「自明の世界」
 を構成→ベラーのいう「共同体」再建への活動ではなく、情報空間の中に自閉して
 しまうベクトルを潜在的に「情報化」が内包しているのではないか

⇒そのことは、個人のレベルだけにとどまらず、国家のレベルでも問題を投げか
 けているように思える→電子的回路によって増幅されたハイ・イメージの世界を受
 容している国家の感覚と第三世界のリアリティとの格差は拡大→マクルーハンが指
 摘した「グローバル・ヴィレッジ」は幻想？

*「情報技術の成果が自ずから全市民の良識として浸透するなどとは考えられない」とい
 う先生の発言に全面的に賛成であるが、ただそれ以上に、従来の「マスメディア型」情
 報とは異質な「情報様式」に媒介された新しい社会情報過程=社会関係のネットワー
 クがもつ「危険性」(or「可能性」)に着眼する必要がある。「社会情報」過程に対す
 る社会学的分析の必要性もここにあるように思われる。

る)を分析の糸口として、ベラーは、アメリカ人の「心の習慣」の変容にアメリカ社会の深い病根を見いだしているのである。ここに、本書の第一の論点がある。

第二の論点は、「公共生活」「公共善」の解体に対抗し、それを克服するための根本的解決案の提示である。アメリカ市民が、ミーイズムと同義となった個人主義と、それに随伴する相対主義的寛容という価値観を超えて、コミュニティの統合性を確証するのに必要であるような「共通善」へのコミットメントへと移行すること、そのためには、「社会的・自然的エコロジー」を媒介とする市民精神を再活性化する必要があることをベラーは積極的に主張する。

「わたしたちはいかに生きるべきか、いかに生きるべきかということをおたちはいかに考えているのか」という人間存在の根本に立ち返った重い問いかけは、現代アメリカ社会論として卓越した、独自の魅力を本書に与えており、アメリカ社会のみならず現代日本社会の分析にとって極めて示唆に富む内容を提示している。しかし、ベラーの分析視点に対して、ある種の「違和感」を感じざるをえない。

その一つは、個人主義的自由の展開によって生成した「拘束なき自我」(unencumbered self)を倫理的コミットメントに結びつけ、「構成された自我」(constituted self)というかたちで自我を社会的・倫理的文脈に位置づけようという主張が、功利的・表現的個人主義によって一旦は駆逐された聖書的・共和主義的伝統の再活性化というプログラムとのつながりで構想されていることである。ベラー自身、両者の伝統に回帰せよと述べているわけではなく、「現在のわたしたちの必要に応じてくれるようなやり方で生かし直すこと」が求められると指摘する。その点で、「拘束なき自我」を一方向的に批判する文化的保守主義とベラーが一線を画していることは確かである

う。しかし、「拘束なき自我」が「構成された自我」を結晶化させるプロセスは、ベラーが想定するかたちではたして可能となるのか。

第二は、上記の問題と関わる。ベラーは、「表現的個人主義」を「功利的個人主義」と同様に手厳しく批判する。しかし、この個人主義の歴史的成立の経緯を振り返るならば、それはたんに批判するだけではすまない重要な位置を占めている。と言うのも、この個人主義類型は、「近代」の社会システムの構造的変容とリンクするかたちで生成したのであり、この個人主義の後にいかなる動向が生まれてくるのか、この点を分析することこそが重要だと考えられるからである。それは、日本社会の問題の考えるとき、とりわけ重要となる。

第三は、20世紀における情報化の特質という問題に深く関わる。ベラーは、アメリカ文化におけるテレビジョン映像の特徴を「分離の文化」として捉えている。そのことに異論はない。しかし、20世紀という時代における「情報」の特質を広い視点から考えるなら、それはいわば「記号消費型文化」とでも言える文化空間を帰結した点にある。そして、この文化空間が「表現的個人主義」の成立とも深く関連しているのである。

それぞれの点について考察しておこう。

2. 「問題」としてのライフ・スタイルの飛び地(life-style enclave)へ

私的権力の効率主義によって生じた「公共生活」「公共善」の解体に対抗する、「社会的・自然的エコロジー」を媒介とした市民精神の活性化というベラーの課題提起は、アメリカ社会においていかなる現実的基盤をもって語りうるのか。すでに触れたように、もちろんベラー自身、伝統的な聖書と共和主義的な自治の精神に立ち戻れと単純に主張しているわけではなく、この二つの伝統を「現在のわた

したちの必要に応じてくれるようなやり方で生かし直すこと」が最大の課題であると示唆している。

歴史的に探究されてきた公共善に関するいくつかのヴィジョンを整理しつつ、ベラーは今日アメリカ市民が直面する選択肢として「行政管理型社会 対 経済民主主義」という対概念を提示する。前者は、「個人の安全を高くして経済成長を広く分かち合うという目標の下に」、政府の部局や委員会や機関といった行政管理機構の重要性に力点をおき、専門家集団の科学的、社会工学的な「解決」を重要視する。それに対して後者は、市民の力を強化して、社会統合のための新しい一連の制度に市民が参加できるようにするということ、これを明確な課題としている。言うまでもなくベラーの立場は後者にある。その場合、問題の焦点となるのは「ライフスタイルの飛び地」といわれる現代人の社会生活の特質である。

満足のいく私生活を行うためのスタイル＝ライフスタイルをなによりも重要視する表現的個人主義の生活文化は、自分とライフスタイルを同じくする者と一緒に過ごすことを求める。消費や余暇といった私生活の領域で「気の合う仲間」と共に過ごすこうした集団を、ベラーは「ライフスタイルの飛び地」と呼ぶのである。それは、地域を基盤とする「伝統的な共同体」ではない。また、エスニック・グループによる「擬似共同体」とも異なる。それはクラブであり、地域的でスケールの小さな活動グループであったりする。それは、確かに現代人にとって必要な人間関係の一つになっている。しかし、こうした活動や集団は「類似したもの同志のナルシシズム」を超えているのだろうか。むしろ大きなスケールの制度と自分たちを結びつけ「生きかたとしての政治」を実践させていくことを困難にしているのではないか。わたしたちすべてがあれやこれやのライフスタイルの飛び地に引き

込まれていく傾向にあるなかで、アメリカ市民がライフスタイルの飛び地を超えて、社会参加とコミュニティの主体に変わっていきえるかどうか、これこそが焦眉の課題なのだとベラーは指摘するのである。

こうした立論は、すでに古典となったD. リースマン「孤独な群衆」のなかの「パッケージ化された社交性」(packaged sociabilities)の議論を思い起こさせる。周知のようにかれは、1950年代に若者を中心に広がりはじめていた「仲間集団」(Peer Group)の機能に注目し、「他人指向型」というタイプを析出したことでよく知られている。ただし、当時はアメリカでも、また日本でも、「他人指向型」は個人の自律性や主体性を失ったタイプであるとして否定的な文脈で論じられてきた。しかしながら、現在の視点で読み返してみると、それは、「人間的な関係や他者への関心を通じて自己のふるまいかたへの自己規制」を行いうる、豊かな感受性を備えた新しい人間像、彼自身の言葉によれば「新しい倫理観」を展望するものであった。しかし、この新しい社会的性格類型が「他人指向自律型」として新しい個人主義の原型となるためには、親密な仲間集団に自閉し、異質な他者や文化との対話を閉ざす「パッケージ化された社交性」の空間を突破しなければならない。リースマンはそのように課題を設定していたのである。この点で、ベラーの「ライフスタイルの飛び地」との類似性は明らかである。

「孤独な群衆」が刊行されてからほぼ30年が経過した80年代、リースマンは自らの展望が挫折し、アメリカ市民の方向は「現在指向的な快樂主義」に向かったと総括した。ベラーは、こうしたリースマンの分析を踏まえている。その上で改めて私的な業績の達成と表現的なライフスタイルの私的な充実にのみ自閉したアメリカ市民に対して、公共の責任を果たす市民精神の再生を呼びかけるのである。しかし、それは、聖書的伝統や共和主義的伝

義」に至った現代人がいかにして共同性を回復できるのか、ここにはベラーが構想する方途とは別のバリエーションもまたありうるのではないだろうか。その鍵は、「表現的個人主義」のこれから、にかかっているように思う。

3. 表現的個人主義の両義性

ジンメル議論を参照しながら作田啓一は、個人主義のさまざまな形態を「理性の個人主義」、「個性の個人主義」、そして「欲望の個人主義」という三つの形態に整理している。ベラーのいう「表現的個人主義」とは、この個性の個人主義、欲望の個人主義と隣接し、両者を包括するような概念内容になっている。

歴史的に言えば「個性の個人主義」は、19世紀後半のロマン主義を背景として芸術領域を中心に成立した思潮である。当時、急速に「近代化」が進行し、機能的な集団の規模が巨大化し、官僚制化していくなかで、集団や制度と自己の発展とが調和しえないことが明らかとなる。そのとき、「個性の個人主義」は、自己の個性をかけがえのないものとみなし、自己を発展させよという個性の命令に忠実であることを求めたのである。それは、広い意味で「自己を目的達成のための手段とすることを拒否し」、「制度よりも自己に価値を置く」考えかたに立脚する。言い換えれば、それは、産業社会の支配的文化となる功利主義的個人主義とは異なり、そうした生きかたに対して「否」を唱える側面をもつものであった。そして、制度よりも自己に価値を置くというこの考えかたは、19世紀から20世紀にかけて多くの市民の共通感覚となったのである。

アメリカ社会の文脈に置きなおせば、そうしたエートスの広がり最もよく垣間見られたのは体制・制度に対する異議申立てを行った1960年代の「ビートニク」から「フラワー・チルドレン」の世代である。かれらは、まさ

しく上記の意味での個性の個人主義を体現する世代であった。反戦運動や公民権運動を支えるアメリカ市民の社会的意識の底流には、ベラーが述べているように聖書的伝統と共和主義的伝統だけでなく、個性の個人主義の考えかたが生き続けていたのである。

ところで、社会参加に繋がる道筋を保っていた個性の個人主義は、50年代から80年代にかけての40年の間に、徐々に、自己の個性の実現というかたちであれ、あるいは自己の欲望の実現というかたちであれ、他者との差異の表現のなかに己の行為の意味を見いだし、さまざまな社会的コミットメントをも自己の個人的な高揚の場とみなす、ミーイズムと同義の個人主義に転換していく。己の欲するものを獲得しそれを楽しむという主観的な営みを「善し」とする社会的価値観が、一般市民の間に瞬く間に浸透していったのである。作田はそれを、「欲望を聖なるもの」とする「欲望の個人主義」と名付けたのである。

ベラーのいう「表現的個人主義」とは、正確に言えば、19世紀から20世紀にかけて「個性の個人主義」から「欲望の個人主義」へと移行したこの個人主義の変容に光をあてたものだといえるだろう。

そこで、ここで指摘しておかなければならないのは、この半世紀を通じて徐々に、しかもその深層から変容した市民層の社会意識が、マスメディアを通して構成された記号空間の複合的な編成と、それを組織していった近代社会システムの変容に深く関わっているという点である。ベラーの分析では、この点が見落とされてしまっており、「表現的個人主義」の両義的な特質が正確に捉えられていないように思う。

4. 20世紀という時代における情報の機能—新しい文化装置

1960年以降アメリカ社会、日本社会はともに、新しい共通の経験様式に直面した。その共通の経験様式とは、マスメディアを通じて提示された「記号」を「見る」こと、映像や音声といった「記号」のなかに「新しさ」を発見し、さらには、映像というかたちで提示された他者に準拠することによって自己の個性の実現をはたそうとする、新しい視覚的経験である。人々のアイデンティティをも記号空間のなかの他者=媒介者との関係で規定していく、そうした新しい文化装置が強力に作動しはじめたのである。「表現的個人主義」は、こうした記号空間の社会的編成と連動するかたちで成立した。

ところで、人々はこの記号空間に、自由に自己のアイデンティティを投影し、「自分らしい」という意識を投影する「作者」として関わっているわけでは決してない。この記号空間は巨大な企業やプロダクションといった数多くの「書き手」によって構造化され、人々の意味付けまでもがすでに先取りされるかたちで条件付けられている、そうした記号空間なのである。自己の個性を実現し、ライフスタイルというかたちで個性を表現しようとする「表現的個人主義」は、他者によって自己の個性が形あるものとして構成される、というパラドキシカルな構造に巻き込まれているのだ。そして、このパラドキシカルな構造を編成したのが、巨大なマス・メディアという社会的装置である。

膨大な量の記号を「見る」という新しいまなざしのなかで、絶えず更新され、絶えず拡大する人々の欲求は、生産ばかりか消費をも効率的な管理の対象とする新しい資本主義の運動過程に包摂されていく。生産と禁欲を支柱とした近代社会システムは、その発展を通

じてシステム自体を変容し、人々の意識を変容させずにはおかなかったのである。作田が「欲望の個人主義」と指摘し、グニエル・ベルが快楽主義と名付けた現代文化の特質は、社会システムの変容と深く接続しているのだ。

20世紀を貫く「情報化」の進展が社会に対して与えた影響のひとつは、上記のような意味での、「記号消費文化」の拡大と自我の変容にある。巨大なメディア産業によって構成された「消費的記号」の生産と流通というなかで、近代システムは変容しはじめ、それに対応する形で市民意識も「表現的個人主義」へと変容したのである。

「先進国」の多くの市民の意識変化の根底に、こうした社会の制度上の変化が存在するかぎり、たんなる批判は意味を成さない。今後の社会システムがどのように変貌していくのか（あるいは社会システムをどう制度的に生かし直していくのか）、そのなかで「表現的個人主義」がどう変容するのか、その点にこそ分析の焦点を据えなければならないだろう。

日本社会は、その文化的伝統からして、「理性の個人主義」「個性の個人主義」を深く内面化することなく、「表現的個人主義」を現実のものとしている。ベラーが主張する「聖書の伝統」も「共和主義的伝統」も存在しないわれわれには、いかなる日本の伝統を生かし直していく道があるのか。現代日本の「表現的個人主義」が、いかなる「構成された自我」を結晶化できるのか、その行方に注目するのも、上記の理由からである。

5. 情報の様式・形式の変化

20世紀の「情報化」の問題を「記号消費文化」と関連付けて考える必要性を論じてきた。ところで、現在の情報技術の革新、とりわけ電子的な情報・通信テクノロジーの発展による文化や社会組織の変容を考えていく上で、

最近とみに注目されているのが、情報の様式、情報の形式という側面から「情報化」の核心・本質を捉えようとする試みである。周知のように、こうした議論の先駆的な役割を担ったのはM. マクルーハンである。20年ほどまえにマクルーハンの議論が人々に受け止められたとき、かれの理論はマーケティングの技法に関する理論として、表層的に理解されてしまったようだ。しかし、20年前とは比較できないほど電子メディア技術が発展した今日、『グーテンベルグの銀河系』や『人間拡張の理論』の中で展開された「メディアはメッセージ」という指摘、活字の時代から電気の時代への移行に伴って線型的な視覚的な知識から非線型的で全感覚的な知識に移行するとの指摘など、かれの理論と主張がいま改めて、本格的に検討されはじめ、かれの視点を理論的に前進させようとする一連の動きがみられる。そのなかには、マクルーハンがかれ自身の視点を確立していく上で重要な示唆を与えたイニスの再評価があり、とりわけ重要なW. J. オングの仕事がある。オングは、メディアの発達を、口承的、書記的、活字的、電子的、という四つのモデルから把握する。かれは、歴史的なメディアの発展に即した詳細な検討を通じて、「メディアはメッセージ」というマクルーハンの主張をマクルーハン以上に厳密に検証したとあってよい。つまり、機械による外爆発の時代に、「車」や「汽車」が人間の身体感覚を拡張し、われわれの空間・環境に対する関係を変容させたように、電気・電子による内爆発の時代の象徴であるテレビやラジオそして電話といったメディアも人間の身体感覚の変容を引き起こし、われわれの世界認識の地平を変容させずにはおかないという点である。いわばメディアを通じて伝えられる「内容」としてのメッセージが作り出す社会的な影響とは別に、書物というメディア、テレビというメディアは、それぞれそれぞれ独自の様式でメッセージを成り立たせている

コミュニケーションの地平を編成し、規定しているということである。人間がコミュニケーションを行う際の媒体であるメディアは、たんなる手段ではなく、身体感覚の尺度や人間の思考様式、主体の世界への拘わり方を根底から変えてしまう構造的な契機なのである。かれの議論の焦点はまさしくその点の解明にあったと言えるだろう。

こうしたメディア論の活性化を背景として、ポスターは現在の電子メディアのもつ特性に分析の焦点を絞って、その社会的・政治的なインプリケーションを解明しようとする。その際、彼が主要な検討課題として取り上げるのは、「情報様式」の変容、あるいは「情報のラッピング」の変化という問題である。例えば、活字から電子的エクリチュールへという記号表現のマテリアルなレベルの変化は、メッセージそれ自体のディスクール編成にまで影響を及ぼし、それがひいてはわれわれの社会的な認識活動の地平を根幹から変容させずにはおかない。「時間的空間的なコミュニケーションの遠隔化の研究が情報様式の問題にとって重要であるとしても、問題の本質は情報交換の布置、情報のラッピングの問題である」。かれの問題の核心は「情報のラッピング」(wrapping of information)の変容による「主体の世界との再一布置化」の問題にある。

では、従来の「マスコミ型」情報と比較して、現在のコンピュータと新しい情報通信システムが結合した電子的情報はいかなる点で革新的な意義をもつのか。20世紀という時代を特徴づけてきた「マスコミ型」情報が、どう変容しようとしているのか。

私見によれば、この点についてのポスターの見解は、相互に関連しあう次の二点を含んでいる。第一は、「言語の自己指示的な様相の拡大」、言い換えれば、指示対象とは何の関係もない浮遊するシニフィエが作動するシミュレーション空間が拡大することによっ

て、新しい社会的構造の次元が生成するという主張である。ポスターはテレビCMを素材に分析を行っている。例えば、床磨きワックス＝ロマンスとして提示されるCMの社会的効果は、心理学的なものでもなく、経済学的なものでもなく、言語学的な効果なのであり、それは「新しい社会形成を立派に構成しうる条件」でもある。この言語構造の次元がコンピュータと結合することにより、現実よりもリアルな、シミュレーションが構成される。

第二の論点は、デジタル・コード化されて蓄積された情報の貯蔵・検索・転送・複製という新しい社会的プロセスが、「データベースの外では存在しないような情報の要素間の関係を『創作する』」というかたちで新しい権力関係の水準を定位するという主張である。データベースという形で集積された知の編成をナビゲートする主体が誰なのか、またそれは、どのような目的で、どのような役割をもって活用されるのか。ポスターは、「しくまれた回路のなかでの情報探し」というプロセスに新たな権力関係の成立を読み取るのである。ここで、それぞれの論点について詳細な検討はできないが、この分析に共通しているのは、電子メディアの浸透が社会的現実＝リアリティそのものの成立面の変容に深くかかわっていると同時に、この新しい社会的装置がフーコー的な意味での権力関係を帰結せずにはおかないということである。時間と空間が成立するうえでの準拠点である身体に支えられたリアリティと、電子メディアによって構成されたリアリティの新たな社会的編成が問われているのである。

ポスターが指摘するこうした論点は、個人のレベルだけにとどまらず、社会的諸集団のレベル、国家のレベルでも問題を投げかけているように思う。

すでに述べたように、これまで巨大なメディア群を媒介とした「社会情報過程」の主要な担い手はマスメディア産業であった。し

かし、新しい情報通信技術の発展は、従来のマスメディア産業という範囲を超えて、国家行政機関と巨大な企業群が情報の生産・流通の主体となることを可能にしている。ここには、管理と制御、集権化と分権化、に関わる新しい社会問題が存在する。さらに、国家という単位を超えた問題も生成している。例えば、現代日本社会に代表されるような高度に電子的な情報回路によって増幅されたハイイメージの世界を構成している「先進諸国」に住む人達のリアリティーの編成と第三世界に生きる人々のリアリティーとの格差の問題、また両者の情報量の格差の問題等々である。

内爆発を通して「グローバル・ヴィレッジ」が現実のものとなるとマクルーハン指摘した。だが、情報技術の成果が自ずから市民の良識として浸透するなどとは考えられないし、諸集団内部・外部のデモクラシーを強化するとは考えられない。ポスターが「情報様式」という理論的な概念を使って解明した中心点は、新しい情報様式に媒介された社会的コミュニケーション関係の危険性を突いた点にある。

6. 「心の習慣」と「情報様式論」から見えてくる課題とは

「われわれはいかに生きるべきか、いかに生きるべきかをわれわれはいかにかんがえているのか。」この問いに答えてきた「生活世界の自明性」は、政治－経済システムの拡大と浸透につれて、その自然の自明性を喪失し、流動化と多元化の波に晒されるようになる。自明性の解体は、親と子、夫婦、個人と共同体、といったあらゆる関係を支えてきた共通感覚そのものの解体にまで導きかねない。こうした自明性の世界が崩壊したあとに、「親密性」を支えるものとして多くの市民が受け入れた価値観は、「表現的個人主義」という極度に私的な個人主義の在りかたであった。しか

し、この「ライフスタイルの飛び地」という「親密圏」における人格相互の関係は、社会的な繋がりを喪失し、文化的な〈意味〉の「解体感」で満ち溢れていないだろうか。個人主義的自由の拡張はたしかに、旧来の伝統からの自由を意味した。しかし、同時に、それは、行為の動機付けや他者との行為連関を構築していく際に必要な〈意味〉をあまりにも私的なものに還元することで、「意味の欠乏」という事態を招いてはいないだろうか。ベラーが解明したのは、アメリカ社会における、こうした事態の深刻化である。

そして、この小論で論じたのは、こうした事態を前にして、マスメディアによって社会的に編成された記号空間が、見えない権力作用を伴いながら、「意味の欠乏」を「解消」するように機能しつづけてきたのだという点である。ポスターの議論は、こうした「社会的情報」の機能が一層拡大し、さらに新しい管理と制御の社会的様式が生み出されることを指摘する。

「社会と情報」というテーマをめぐって、二つの課題を提起したい。一つは、シミュラクルの拡大のなかで一見システムの機能から脱した浮遊したシニフィアンの連鎖と考えられる記号を、市民がどのような〈意味〉として受けとめ、あるいは拒むかという問題であり、二つめは、巨大な企業と国家行政機関が情報主体となる新しい事態のもとで、情報＝市民主体のネットワーク化がいかにか果たされうるかという問題である。ベラーのいう市民精神の活性化、コミュニティの再生も、この二つの課題の解決無しには考えられないだろう。

参考文献

- ・ Bellah, Robert N. et al. : Habits, UPC, Berkeley 1985, 心の習慣, 島蘭進 中村圭志 訳 みすず書房, 1991
 - ・ Poster, M : The Mode of Information, Policy Press 1990, 情報様式論, 室井尚他訳 岩波書店, 1991
-
- ・ Bellah, Robert N. et al. : The Good Society, Knopf, NY. 1991
 - ・ R. N. ベラー : 日本の宗教伝統と近代の袋小路, 思想, No. 803, pp 103-113
 - ・ 作田啓一 : 個人主義の運命, 岩波書店, 1981
 - ・ Bloobm, Allan : The Closing of the American Mind, Simon & Schuster Inc. NY. 1987
アメリカン・マインドの終焉, 菅野楯樹訳 みすず書房, 1988
 - ・ D. リースマン : 孤独な群衆, 加藤秀俊訳, みすず書房, 1964
 - ・ D. リースマン : 二十世紀と私, 永井陽之助訳 中公新書 1982
 - ・ Innis, Harold A. : The Bias of Communication, UTP, Toronto 1951, メディアの文明史, 久保秀幹訳 新曜社, 1987
 - ・ McLuhan, M. : The Gutenberg Galaxy, UTP, Toronto 1962, グーテンベルクの銀河系, 森常治訳, みすず書房, 1986
 - ・ McLuhan, M. : Understanding Media, McGraw-Hill Book, NY 1964, メディア論, 栗原裕・河本仲聖訳, みすず書房, 1986
 - ・ 声の文化・文字の文化, 藤原書店, 1991